

柏木義円『上毛教界月報』論文註解稿(四)

市川浩史

◎本文、並びに註、解(承前)

○第二号(明治三十三年七月廿三日)

発行人兼印刷人 大久保真次郎

種の撰別と服役

本篇はヘンリー、ヴァンダイク博士の所説として一昨冬の福音叢誌に掲載せられしもの、特に吾人に益する所あれば此に転載して読者諸君心靈の糧に供す

北米の文豪ナタナエル、ホーゾルン氏は嘗て新しきアダムとエバが此世界に天降りたりといふ一の想像談を其著書に掲げました。『時は維れ世界の終末審判がすみし後の事とて人類は一人も残らず此世から取去られて影だに留めず、唯彼等が幾千年來此世に在りて為し遂げたるすべての事業及び発明物は其無数の住宅と共に寂然として旧形を保存せり。卒然此の如き境涯に立ち頭はれたる新人種の祖先たる兩人は此を視、彼を眺めて只管驚愕に堪へざるものゝ如し。彼等が人なき街衢を過ぎ往くに、一方には巍然として雲に聳ゆる大厦高樓のあるあり。其傍には見る影もなき賤が伏屋の潜めるあり。榮耀榮華に耽りし痕と辛苦艱難を嘗めし痕は到底目前に参差て天淵月竈の相違を示せり。今や兩人は此人間の状態の不均を見て歎息止む能はざるものゝ如し』此れは是れホーゾルンが人生の不均と其外面上の不公平とに対する自己中心の疑問を書中の人物を借りて写し出したるものでありませ

う。富者は益々富み貧者は愈々窮し余りある上にも与へられ足らぬ中より猶ほ取立てらる過福は我身一つの勤勉と怠慢とに由るのみかは終生正直に勉勵して猶ほ窮するあり。不義怠慢の輩にして父祖の恩沢に飽くものあり。現今欧米社会の状態を觀ば、新來のアダム、エバと其感を同ふせずには居られぬ事と存じます。苟も人類の安寧幸福を希ふ者は現今欧米社会の状態に対しては一種言ふ可らざる苦痛悲哀を催さざるを得ん次第であります。不思議にも許多の原因に由りて此感情は近時益々深くなり、遂に現世紀に於ける最も著しき特徴の一に数へらるゝに至りました。蓋し人類が其同胞の悲痛困難に対して今日程広く鋭く且つ恒久に感覺した事は古來未だ嘗てありません。或る意味より云へば此の一事は当代の名譽光榮であります。即ち是れ道義的感情の勃興したる証拠に外なりません。併し退て考へますれば此徴候は現時に於ける最大の危険であります。此感情は懷疑的精神に執着せられ且つ虚無主義流の疑心を起さしむる弊があります。…曰く『社会万般の事物皆誤れり、邪曲なり、不公平なり。人類は現在の社会制度に由りて欺瞞され虐遇され且つ压制せられつゝあるなり。若し神が此制度を造れりとせば神の為に禍なる可し。然れども神がそを造り玉はざりし事は確かなり。否神が此世に在まさる事も亦確かなり。此不均なる世界は人間の過失に出づ。其救治策一あるのみ。即ち現存の制度を全然打破して更に之を新設する事は是れなり。為し得可くんば茲に一新世界を創造せよ。若しくは為すこと能はずんば旧制度を一掃して其痕跡なからしめよ。蓋し此不均なる現社会を存在せしめんよりは

寧ろ混沌たる荒廢に帰せしむるを以て優れりとす』と此の如き叫声は今や此世界に鳴り轟きて社会の根柢を憾動せんと致して居ります。凡そ誠心あり思慮ある男女にして此憤怒と絶望の叫びを聞いて其の心を痛ましめぬものはありません。吾人は先づ此叫声の由て来る所の意義を探り、其感情を斟量せねばなりません。然る後我等が為す可き義務の那辺に存するやを知ることが要します。抑も彼等の言ふ所を眞の公平に適へりや、將た真成なる智者の言なりや。旧世界を譴責して之を全然破壊せよと云ふは果して新しきアダムの聲であるか。此疑問の性質は吾人をして主基督に到りて其答案を謂ふの止む可らざる感ぜしめます。基督は此不平等なる世の中に住み乍ら完全なる平等に仲間入を為し、目以て見る可らざる神の都の市民となる可き秘訣を知て居り玉ひました。其秘訣とは即ち基督が説き示唆し玉ふたる最高至聖の教理即ち服役の為に神の選びを蒙むると云ふ事であります。我儕は此秘訣を知るに先ち人生の不平等に関して基督の見解を学ぶ事が肝要と存じます。第一基督は我儕が眞誠の幸福は外部の事情に由らずして内心の状態に由るものであると教へ玉ひました。生命は食物よりも優り、身体は衣よりも優ります。人の生涯は有つものゝ豊かには由りません。富める国必ずしも平和ならず、喜樂は必ずしも富貴安逸にして多くの奴僕を召使て奢侈を恣にする所の家庭にのみ住むものに非ず。人の生涯は如何なる状態に在ても夫れ相應の愉快あるものなり。労働は健康の基である。最良の快樂は概ね何人も等しく享け得らるゝものであります。予は決して基督が過酷なる主人の下に牛馬の如く追ひ使はるゝ者の辛苦、若くは压制不法なる法律の下に呻吟せる労働者の惨状を顧み玉はざりしとは申しません。併し彼が吾人に教へたる重要な点は人生悲惨の眞源は貧窮に在らずして悪しき心に在りと云ふ事に存じます。仮令物質上の支給は其分配不平均なる世の中でも苟も此人生てふ賜物を喜んで享くる者に取りては此人生は偉大なる賜物なる事を教へ玉ひました。看玉へ、基督が説き玉ふたる九福の喩（馬太五章三より十二）は少数者の専有す可きものでなくて反て万人の望て得ら

る可きものではありませんが、是等の幸福を享くるには外形上の不平均は毫も頓着するには足りません。却て之れ有るを当然と致します。就中義しき事の為に責めらるゝ者は福なりと云ふが如きは世界に於ける悪の勢力が善の勢力に凌駕する事実を示したものでありませう。基督は一言だも此地上に全く不平均のなくなる時代が来らん事を語り玉ふたる事はありません。ケレども彼は此表面上の懸隔が虚妄にして一幻影に過ぎざるものなる事を教へ玉ひました。智者達人の悟る能はざる秘密をば却て赤児と愚者が理會し得る事あり。此世の財に乏しき奢が富者に優りて多くの宝を天国に蓄ふる事あり。是れ即ち其的例であります。基督は忙劇の中にも休憩の余地あり、眞の氣散じは善事の為に疲労せし際に在る事を教へ玉ひました。彼は此世に於て幸福を完ふす可き唯一の途は第一神の国と其義を慕ひ身を以て同胞の幸福を計るに在ることを説き玉ひました。所謂世俗的安樂を度外視せし点に於ては基督と他の聖賢とは異なりません。裕福にも困厄にも病める時も健康なる時も独居する時も社会に立つ時も基督の十字架を取りて神意を奉行し其中に心靈の平安を見出すことはそれが基督が他の聖賢に異りて特に吾人に垂れ玉ひりました教訓であります。現世界の不平均、不公平に対する我儕の見解を正さんが為め基督が吾人に与へ玉ひたる第二の教訓は来世に関する教であります。来世は現世と全く別種のものに非ず、同一の生命が新しき境遇に永続せらるゝの謂であります。此世界は世界の全部を掩はず、更に他の世界がありて更に完全の状態に於て存続致します。此他界は現世の不都合を正し其不足を補ひます。来世を談ずる奢を嘲弄するは現時の風潮でありませんが彼等は他界主義と称して之を非難し来世の教は 人心を高むるの力なしと思惟致します。然れども基督はしか思惟し玉ひません。彼は心靈不朽の事に依りて屢々慰藉を与へ且つ人心を警醒致します。彼は只管其庫に穀物を積みて自らの心靈を顧みざりし人の愚妄を誡め玉ひました。又彼は弟子等に向ひて彼等が義しき事の為に責めらるゝ時は歎び樂しめ天に於て其報大なればなりと告げ玉ひました（未完）

註

(1) たとえば、井上哲次郎。

解

この回の論説はヘンリー・ヴァンダイクの論文を転載したものである。ヘンリー・ヴァンダイク (Henry Van Dyck, 一八五二—一九三三) はアメリカの文学者、長老派の神学者である。このころの『福音叢誌』にはたびたび登場していて、講演などが翻訳されて掲載されている。ただこの「神の撰別と服役」となったもの論考は確認できなかった。『福音叢誌』は「欧米宗教界における福音的キリスト教の言説を翻訳紹介する月刊誌」(『日本キリスト教歴史大事典』)であった。柏木がこのような性質のこの月刊誌を購読していたとすると、柏木の牧師としての高い素質の一角垣間見える。

雑録

○食時の祈り。は基督信徒の必ず為す所なり。土州藩などにては武士の家では食時必ず家長が拝なるものを為して而して後食に就く。是れ君恩を記するなりと片岡健吉氏は申されたり。貝原益軒食時五思の説亦此意に合するあり。今茲に之を載録す。

一には此の食の来る所を思ひやる可し。幼くしては父の養を受け、年長じては君恩に依れり。是を思ひて忘る可らず。或は君父ならずして兄弟親族他人の養を受くる事あり。是亦食の来る所を思ひて其めぐみ忘る可らず。農工商の我力に食む者も其国の恩を思ふ可し。二には此の食もと農夫勤勞して作り出せし苦しみを思ひやる可し。忘る可らず。自ら耕さず、安樂にて居乍ら其の養を受くる其の樂を樂む可し。

三にはわれ才徳行義なく君を助け民を治むる功なくして此の美味の養を受くる事幸甚し。

四には世にわれより貧しき人多し。糟糠の食にも飽く事なし。或は

うえて死する事あり。われは嘉穀をあく迄食ひ飢餓の憂なし。是れ大なる幸に非ずや。

五には上古の時を思ふ可し。上古には五穀なくして菓木の実を根葉を食して飢を免る。其の後五穀出来ても未だ火食を知らず、釜甌なくして煮食せず生にてかみ食はゞ味なく腸胃をそこなふ可し。今白飯をやはらかに煮てほしいまゝに食し又あつものあり汁ありて朝夕食にあけり。且酒醴ありて心を許しましめ、氣血を助く。去れば朝夕食する毎に此の五思の内一二なりともかはるゞ思ひめぐらして忘る可らず。然らば日々之樂も其の中に在る可し。是愚が臆説なり。

○臨終の福音。仏蘭西の一地方にエム、ミリエルとなん呼べる良監督あり。或る時人を殺して死刑の宣告を受けたる凶漢ありけるが、愈々明日が刑の執行と云ふ其夕司獄官の情けにて臨終の慰めにもと或る牧師を招じけるに、病氣でもあり我務めに非ずとてにべなく断はりて往かざりけるをミリエルは其事を伝へ聞き、其れこそは我務めならめと取る物も取り敢えず直ちに獄舎に赴き親しく凶漢の名を呼んで其手を取り、偕て話し始ては寢食をも忘れ其の夜は彼と共に獄舎に明し、或は彼の靈魂の為に神に祈り又は神に一致せんことを勧め最も単純にて最も善き真理を語り続け有らゆる手段を尽くして彼を慰め励ましけるが彼の為には唯恐ろしき暗黒測られざる深淵とのみ見へし死も天の一方に微光を認むるが如きに至りたり、斯くて愈々翌朝となりければミリエルは縄付きなる彼と相並で同車して今獄舎より刑場にと来り断頭台へさへも相携へて上りて其の辱めを分担しけるが昨夕迄恐怖に打てれ死せるが如き彼は今は其靈を神に委ねて希望を以て輝き居たり。斯くてミリエルは彼を抱て居り乍ら今やギロツチンの断頭斧が落ち来らんとするの一刻那 更に声を励して

人が爾を殺すとも神は其生命を回復し玉ふ可し。世は爾を棄つるとも爾は更に天父を見出すことを得ん。折れよ。任せよ。生命に入れよ。天父は此処に座すぞ

と曰ひたりしとぞ。

宗教は単に治国の要具、社会改善の手段なるか、今や刑場の露と消えんとする一凶漢に全力を尽くして教を説くミリエルの如きは愚かなる事のみ。宗教を以て唯品性修養の道と為さば人の臨終に始めて教を説くは徒らに苦痛を与るのみにて何の用をも為さざる可し。唯靈魂の高貴なる価値と其永存とを確信する者にして初て這般の消息を解す可きなり（路加伝廿四章三十九節以下参照）

○禁酒美談 是れは警部某氏より大久保牧師^②への私信に係れど公益ありと認めて同牧師の允諾を得て左に抜載す。

（前略）尚ほ禁酒の件に付屢々御忠告を忝くしたるに、元來飲酒に付ては節酒の主義採り居り、適度の飲酒なれば身には害なくて反て益ある様被考、遂に御忠告を実行する事を致さざりし処、偶と考る事有之、先月一日より断然禁酒致し、如何なる筵席と雖ども断乎として杯を手に触れざる様に致し、爾來克己の念を養成致候処、頃日に於ては着々奏効の都合に有之。而して禁酒の考を起したる際は他戒的の思想よりなし。終身禁酒と云ふ様な確固たる思想なかりし処、兼て御話申上置候通、養母久々病気の処養生不相叶、先月二十五日永眠致候。○は明治廿一年より処々浪々致し海山も畜ならざる大恩ある父母三人に対しては死に目にも逢ふ事を得ざる悲境に遇ひ、加之公務上並に私事上より遂に帰省を許さざる事状に遭遇致したるより此処に益々禁酒の念を確くし、終身不孝の紀念として、自分に向て禁酒の厳令を下したる都合にて兼て御忠告の御芳志を此に実行致す事と致し候……左の酒に対する伊呂波戒め歌を得たり。栃木県足利の画家草雲の作なりと申候。

如何に上戸聴き玉ひ、論にはならぬ事乍ら、初めて意見を致すぞや。苦々敷は酒の癖、本性迄も失ふて、平生宜敷人柄も、途方もなしに酔乱し、智慧分別もかき曇り、利巧な人も鈍に見へ拔身狂ひのアブナサよ、類を集めて日を暮らし、をさへつさへつ夜を明し、若きも老も同様に、かぬる処も更になく、夜毎毎日に寄り寄り、太平楽を吐き散らし、礼儀作法も打忘れ、傍にあり合ふ鉢肴、摘み散

らして喰ひこぼし、猫にも劣らぬ不行跡、何を云ふても聞入れず、乱気と云ふか気狂か、無理な事をば理ありげに、ウヌの吾れのと悪口し、如何なる耻も顧みず、後の憂を引出し、親兄弟に苦勞かけ、クダ巻き掛けていやがらし、やみくも人の処へ行き、まだ其上に御坐敷へ、ケン何時迄も吐散らし、不首尾乍らも明る日は、断り云ふて懲りもせず、酔に乗じて又出掛け、手前計が面白く、明る朝したの顔色は、さも病人に能く似たり。狐の落ちた風情にて、夢の様だと独語、醒めたる時には後悔し、見られた様はなかりけり。しづくも吞まぬと云ひ乍ら、酔が流ればそろ／＼と、冷でなりとも一と向ひ、モ一これぎりも聞き飽きた、せめて半日止め玉へ、末繁昌を思ひなば、京から慎み玉まふ可し。

吾々屢々実験ある身は読む度毎に背に汗する事に御座候……今後は尚ほ一層御芳志を蒙むり屢神の福音拝聴仕候。

註

（1） 貝原益軒「食時五思」の説は、『養生訓』巻第三の飲食（上）に出る。

（2） 高崎教会の大久保真次郎牧師のこと。本紙の発行人でもあった。

解

このたびは柏木自身の巻頭論文でなく、他からの転載であったからか、そのあとにこのような、やや軽めの論調の文章が掲載された。食事時の祈り、臨終の福音と禁酒の美談と一貫性はみられない。キリスト者ならば必ず食事時には祈りをなす、と述べて、貝原益軒の「食時五思」の説を掲げている。柏木はしばしば儒者の文章を引用するが、益軒も柏木好みのひとりであった。

つぎの臨終の福音では、前にも引用したユーゴーの「レ・ミゼラブル」の重要な登場人物である「エム、ミリエル」なる「監督」（一般的な翻訳では司教）に再度言及している。ここは、いわゆるジャン・

バルジャンに關することではなく、ミリエルが教悔師として死刑執行寸前の罪人のために祈っている場面である。死刑執行寸前という、その人にとつて最期の一瞬に「宗教を以て唯品性修養の道と為さば人の臨終に始めて教を説くは徒らに苦痛を与るのみにて何の用を為さざる可し。」ときわめて切実にして他のものに替え難い彼の最期の一瞬を讀み解こうとし、「唯靈魂の高貴なる価値と其永存とを確信する者に於て初て這般の消息を解す可きなり」と述べている。ミリエル自身は「靈魂の高貴なる価値と其永存とを確信する者」であるといえるが、この箇所に関して註として「路加伝廿四章三十九節以下参照」とあることは重要である。このテキストは、復活したイエスがエマオで現われ、人々にイエス自身の手と足とを見せたという箇所である。すなわち、ミリエル司教の罪人の臨終の際の福音の祈りはイエスの「復活」を以て解釈されようとしていたのである。これ以上の詳細な展開がないのが残念であるが、柏木はこのようない見軽目に見える論説においても重要なメッセージを籠めて語つたのである。

○第二二号（明治三十三年八月二十日）

発行人兼印刷人 大久保真次郎

神の撰別と服役（承前）

若し此人生を以て人間の能事足りりと致しますれば現世に於ける人間の存在すら十分に解釈することは出来ません。此地上には天に於て解明せらるゝより他に解明の道なき神秘があります。又天に於て医するの外他に医す可きの途なき憂哀があります。此地球上には人が人に対して為したる恐る可き罪惡にして露見せざりしものもありませう。巧みに法網をくゞりて罰せられざりし罪人の中には実は天地容れざる悪漢がありませう。或は幸なくして刑せられ冤を雪ぎ得ずして無限の怨恨を呑みしものもありませう。是の如き不都合不公平をしてとこしへに埋没せしむると致しますれば人生は実に了解し難きものであります。現世の不公平は永遠無窮の權衡に依て正さる可き筈であります。

今は勤勞の時期である。試験の時期である。報酬分配の日は必ず来りませう。此世にて為されし至貴の勞働は必ずしも此世にて報酬を受けませぬ。譬へば貧民、不具者、跛者、瞽者、などの為に為し、善業の報酬は如何でありますか。聖書には「爾筵を為さば貧者、廢疾、跛者、瞽者などを請け。然らば爾福なる可し。蓋彼等は爾に報ること能はず、義き人々の甦らん其時爾に天よりの報答あればなり」と記してあります。

イエスの教訓は前述の次第であります。去らば社会の不平均は人間の最大目的を達するに障害物ではありません。寧ろ其為に必要な方便であります。人が天の生涯に入る可き修練を積む為に欠く可らざる要具であります。イエスは此世の財の分配を正當ならしめん事を目的としたる人ではありません。「人よ誰が我を立て、汝等の裁判人又物を分つ者と為し、か」と明言して此事の自らの任に非ることを御示しなされました。イエスは平等主義を説かずして同胞主義を唱へ玉ひました。同胞兄弟と云ふ中には固とより不同あることを含蓄して居ります。即ち長幼の別高下の別があります。人間の生涯に種々の區別あるは徳を養ふの基ひであります。乙が甲に依頼する時は乃ち感恩忠順の徳を生じ、甲が乙を支配する場合には乃ち正義仁恵の徳を生じます。「与るは受くるよりも幸なり」^③天は我等に其賜を分つに方て之を受く可き機会と之を受く可き責任とを与へ玉ひます。同胞の眞の福祉を増進せんが為に力一杯を尽くし品物を与ると同時に己れ自身を与人こそ誠にイエスに従ふ途を得たる人であります。……イエスの教は人間に不平等の点あり且現世界に於ける事物の配当均一ならざることを吾人に指教致しました。啻に現世の事物のみならず心靈上の祝福に至ても亦不平等の觀があります。或る者は生れ乍らにして天国に入り易く、又或者は先天的に真理の光に遠かり許多の障礙物に妨げられて正しき生涯に復し難き等の事があります。是れ何に由て然るか……之を解釈するものは即ち心靈界に於ける服役（人の幸福の為に尽くすこと）の理法であります。神が人を選び玉ふや独り自ら救はるゝ為のみ

ではなく寧ろ他を救ふ事に由りて自らの救を得んが為であります。此故に神の国にて最大の者はすべての人に服役する所の者であります。

此真理は恰も基督の生涯に適合致します。彼は神に選ばれたる愛子であります。而して服役は彼が最上の歓楽で又彼が生涯の冠冕であります。弟子等が知らざりしイエスの心靈的食物は天父の御旨に従て人類の為に尽くす事でありました。馬太伝廿五章の十四以下及び路加伝十章の十三以下は即ち選別と服役の真理を説明したるものであります。願はくは我等活ける基督に従ひ基督の為に同胞兄弟に事へ窮りなき生命に入らんことを。

註

(1) 新約聖書「ルカによる福音書」一四章一三、一四節

(2) 新約聖書「ルカによる福音書」一四章一四節

(3) 新約聖書「使徒言行録」二〇章三五節

解

この論説も文体からみておそらく礼拝説教の草稿と思われる。同じタイトルをもつ前号の論説と比べてたいへん分かりやすい論旨であるが「服役」という語彙に戸惑うかもしれない。もちろんこれは「基督」によつて囚われる、の意である。私たちが「天に於て医するの外他に医す可きの途なき憂哀」に遭遇した時、いかになすべきか、という難題である。ただ「去らば社会の不平均は人間の最大目的を達するに障害物ではありません。寧ろ其為に必要な方便であります。」という考えは、きわめて新鮮なメッセージとして受容できるだろう。社会の不平均は「人間の最大目的」を為すに必要な「方便」である、というのだから。方便は本来仏教語で、手段の意である。世に心身の障碍をもつ者がいる、そのことは神の救いにおいて必要な手段であるという。ごまかしてもない、憐れみでもない、救いのために必要な手段である、と。柏木の真骨頂であらう。

〇第二三号（明治三十三年九月二十四日）

教会の基本財産

発行人兼印刷人 大久保真次郎

今日教会の維持法は概して信徒が其信仰の分量に依りて月々献金する所のものを以て営み来るものなり。去れば死亡に依りて会員の数、著しく減ずるか若くば不幸にして会員の信仰冷却する時は往日盛観を呈したる教会も今日は其維持にすら困難を覚ゆることなきに非らず。斯る悲運に向ひたる教会こそ格別に常住牧師が在任して其衰勢を挽回するに尽力する必要があるに反て牧師を招聘するの力なきことあり。今日は進で道を伝へ神の国を拓開するに急にして亦退て此辺の事を慮るの違まなしと雖ども将来我国の基督教会をして確実なる進歩を為さしめんには預め此辺の事を慮るは亦全く無用の事に非る可し。否な大に切要なる事なる可し。然らば之を如何にせば可ならんか。教会常費の全部を基本財産に取るは会員の献金の精神を鈍らし教会維持の責任を忘れしむる所以にして信仰の為めに或は害ある可しと雖ども基本財産ありて常費の半分位は之に由て弁ずることを得ば教会非運の節は之に由て支ふ可く、教会隆運の日には伝道拡張の方に向ふの余力なる可く、教会の基礎此の如くにして始めて確実なる可きなり。去れば吾人は各教会に今より基本財産を積み立つるの方針を取られんことを勧告せざるを得るなり。方針既に此に在らば其方法の如き種々ある可しと雖ども會員死亡の際志あるものが基本方針に献金するの習慣を造るが如き最も適當なる方法の一ならんか。生命保険を為すに当り、其保険金の幾部分を教会の基本財産に充つると約するが如きも亦可ならんか。其他結婚なり出産なり感謝を表することあるに当り或は基本財産に或は教会必須の物件に寄与する所あり。教会を以て感謝記念の表はれたる所と為すは実に美はしくして亦有為なる方法なる可し。吾人は愛兄弟が進で此良習慣を諸君の教会に造り玉はんこと切望の至りに堪へざるなり。

解

この論説は、伝道的内容ではなく専ら教会の内部に向けての教会維持策の提言である。会員死亡した時、また結婚した時などの感謝のために献金するという習慣を造れば、云々という策を、具体的な固有な名詞なく提言している点、却って切実さを感じさせる。この時点では上毛地区の諸教会ではなお、経済的不安定は避けられなかったのである。

非飲酒論

基督信徒と飲酒 吾人は敢て飲酒其事を以て直ちに不道德と為すものに非るなり。況んや之を以て不信仰と為すをや。然れども其飲様に由ては飲酒は其精神の自墮落を表はすなり。其克己の気象なき薄志弱行を表はすなり。他人の徳を建つるに無頓着に社会の風紀を正すの志なきを表はすなり。然り飲酒は或る場合には其人に道義の觀念の甚だ薄弱なるを示すなり。吾人は敢て補神養氣の為に適度に飲酒するを強ち非とするものに非るなり。然れども客を延て飲を侑め酔を買ふに至ては之を非とせざるを得ず。基督信徒は世の鑑なり。又光なり。其家庭は厳正ならざる可らず。然るに其家に於て飲を侑められ酔歩蹣跚失態を呈露するものあらば如何。其家に於て酒味を覚へ遂に大酒一生を誤るの青年出でなば如何。且酔へるもの其癖好も児童にさへ軽侮せらるゝを免れず。若し酒癖悪しきに至ては下らぬ管を巻て人を苦め実に厭はしきものなり。酒に酔へるものには品格も何もあつたものに非ず。飲酒する人物は自ら其品格を毀ち飲酒する家庭は自ら其風紀を紊る。吾人は敢て極端なる禁酒論を主張するものに非ずと雖ども基督信徒の高尚にして重大なる責任を完ふせん為に儼然非飲酒論を唱へざるを得ざるなり。飲酒するものは往々にして曰ふ、是れ交際の為めなりと。吾人は寧ろ己が嗜好の為に飲酒すと曰ふものを好みず交際の為め飲酒すと曰ふものは吾人は其人の卑屈なる俗物にして自ら守るの志節なき人に非るかを疑はざるを得ざるなり。真正の交際に飲酒が果して何程の功をか奏する。交際の為に飲酒すと曰ふものは交際の為に他の

節操をも売る危険なきを保せず。且若し飲酒に依て交際間得る所あらば其は必ず公明正大なることに非る可し。要するに基督信徒は飲酒の嗜慾を抑制せんこと肝要なり。之を全く禁せんことは更に望まじきことなり。

教育家と飲酒 吾人は多言せざる可し。唯中学程度及び其以下の教育に在ては品性の修養氣質の訓練を重しとせざる可らず。而して克己自製の習慣を養成して氣質を訓練せんには禁酒禁煙の如き若くは芝居、浄瑠璃等淫楽ヶ間敷場所に立寄るを禁ずる如き最も意を致さざる可らず。就中、禁酒の如きは中等教育の訓練には最も重きを置かざる可らずと信するなり。然るに如何せん、滔々たる今日中等教育家は概ね是れ飲酒の人なれば禁酒の中等教育の訓練に如何なる関係あるか。是等を研究することすら或は為さざる可し。寧ろ自家の弁護の為に非禁酒論を唱ふる位の事なる可し。吾人は中等教育家中酔はざる教育家ありて教育上より中等教育に禁酒論 唱道せられんことを熱望し止まざるなり。

禁酒会と宴会 婚礼を始め吉凶の集会概ね酒を用ゐざるなく、其弊害言ふに勝へざるものあり。心あるもの此弊風を漸次矯正せんと欲するも個人の禁酒は独り自ら慎めば足れり。左程困難ならずとするも吉凶の集会に郷党の習慣に背くは吝嗇など譏られて頗る困難なる辺もあらん。斯る際には禁酒会に入て其主義を表白し居らば他人も首肯する所ありて自ら禁酒の旨義を貫徹する便なる可し。禁酒会に入るは己の為めよりも寧ろ主義拡張の為なり。吾人は至る処に禁酒会の起りて婦人矯風会と相待て社会の風紀を矯正せんことを望むや切也。

解

この禁酒論は、生活上の倫理向上を志すことをひとつの目標とした組合教会独自の主張である。実際、安中教会の存したかつての安中市街には酒肆はなかつた。たんに教会の会員間の問題としてではなく、(中等) 教育に携わる教育者が教育のために禁酒すべきだ、というの

が柏木の独自の、そして貴重な主張である。つまり、個人間の禁酒に係る倫理を社会にまで及ぼそうとした、という意味において、である。

内外雑纂

●北清事件と開国進取の国是 義和団の暴乱より起りたる北清事件は端なく我国の実力を発表して大に我国の地位をして列国の間に重からしめたり。世界の舞台に現われたる 日本今後の方針如何。是れ実に国を挙げて講究す可き重大なる問題と謂ふ可し。今後世界の大勢は人種を以て相分立し、白色人種と黄色人種相戦て雌雄を決するに至る可きか。然らば我国は到底欧米をして敵として立たざる可らず。東洋人種は先天的に欧米人種と両雄並び立たざるなり。然れども學術の眼中には人種の黄白なきあり。宗教の眼には人種の区別映ぜざるなり。將來世界の人心を支配す可き両大王たる學術宗教の眼中既に人種なくんば人種の異同は未だ以て世界を二分して相戦はしむる動因たるに足らざるなり。吾人の見る所を以てすれば文明の異同こそ国々をして永く相分立して相斃さざれば止まざる程に根深き動因なれと信ずるなり。然らば今後世界に於て相争ひ相衝突す可き文明とは何ぞや。言ふ迄もなく基督教的文明と東洋的文明……儒教的仏教的文明……なるなり。我国は何処迄も支那朝鮮と共に東洋的文明を骨として之に西洋的物質的文明の衣を被らせ基督教的文明の列国と相衝突して雌雄を決す可きが將た又世界の大勢に順応し、世界の文明に同化して永く國家の平和を享受す可きか。是れ実に今日に於て我國の識者が嚴肅に考慮す可き大問題に非ずや。開国進取の国是とは徒らに西洋皮相物質的文明を採用して止むの謂に非る可し。開国進取の国是とは基督教的文明採用の意味ならざる可らず。否な西洋文明の精髓たる基督教の採用を意味せざる可らず。開国進取が保守退嬰が我國將來の国是如何。是れ実に我國の興亡に関する問題と見るも決して過慮に非る可し。仏教家と神道家も我國家の爲め深く此問題を考慮せられんこと切望に堪へざる也。

●廢娼問題の進行 帝国法官は既に帝国法律に依て娼妓廢業の自由を公宣したり。内務省豈に黙して司法行政衝突の紛擾を座視して可ならんや。果せる哉、内務省は九月一日を以て各府県知事に宛て左の通牒を發したり。

娼妓廢業届に樓主又は取締の連署を要するや否やに付ては府県の規定区々一定せざるも内務省は必ずしも連署を要せずとの方針を取り居ることにて府県内には従來連署を要せざる取扱になり居る向も往々有之。又近來連署を要せざることに改めたる府県も少なからず。又連署を要する規定ある地方に於ては娼妓は廢業届に樓主又は取締の連署を請はざるを得ざるも樓主又は取締に於て連署を拒み届書の進達を妨ぐることは出来ざる筈にて若し意見あらば其意見を具して差出す可きものなり。万一連署を拒み届書の進達を妨ぐる場合に於ては娼妓は其理由を疎明して届書を警察署に差出して差支なし。此の如き場合に於ては警察署は事実を徹して調査を為し若し貸座敷業者の申分が唯娼妓に貸金ありとの外、何等の理由なき時は其の廢業届を有効として受理す可きものなり。蓋し貸金は娼妓の自由を拘束する理由とならざればなり。

而して二六新報社員が危険を冒して健闘したるの末、警視庁が浅草警察署をして吉原娼妓綾衣の樓主及び三業取締の連署なき届書を受理して自由廢業を許さしめ、尚ほ娼妓營業規則を改正したることにて内務省の意志の愈々明確にせらるゝあり。前司法次官山田喜之助氏、文部次官奥田義人氏、明治法律学校校長岸本辰雄氏等法曹社会に重きを為す人々が何れも名古屋地方裁判所の娼妓廢業の自由を公宣したるを激賛せらるゝあり。特に山田喜之助氏の如きは娼妓廢業に関する事件は喜んで引受く可しと迄に同情を表され、毎日新聞、二六新報等に椽大の筆を揮て頻りに廢娼の氣焰を鼓舞し救世軍、二六新報社員の如きは醜類の爲に負傷して意氣益々振ひ屈せず妖窟に進入して益々健闘を継続せんとす。北米の志士は一国の内乱を賭し砲烟彈雨を漲して彼奴隸制度を破壊したるに非ずや。況んや彼黒奴制に勝りて遙かに醜惡なる

るを得ざるなり。今や東本願寺は北浜銀行より借り入れたる八十万円の債務期限既に迫り来らんとして償却の目途更になく、一種の債務を募集して門末信徒に勸財を強ひんと目論見しも内務省が宗教法人の寄附負債募集の取締に関する嚴重なる省令を發布するに逢ひ、次で宗教局長より宗派は法人に非ざるを以て債権募集の能力なき旨を通牒せられて殆ど窘蹙の態に居るの時なり。知らず此大興行は果して此財政の危機を救ふに足るや否や。福澤翁の時事新報は大に仏僧を罵て曰く

今の社会には俗僧ありて仏法なし。政府が之を宗教家として待遇せんとするは門乞の乞食を座敷に請し馳走を饗せんとするが如し……
 腐敗僧侶をして今日の如き狂態を恣にせしむるは文明社会の耻辱にして我輩の一日も堪ふる能はざる所なり。

依然専制の制度を維持して旧習を遺存し居るものは仏教社会、特に東本願寺派なるに非ずや。公然金銭を得て位階を売るの怪事あるものは東本願寺なるに非ずや。信徒の迷信愚昧を利用して金銭を絞り取り以て威福を為し豪奢を極むるものは東本願寺なるに非ずや。門徒に生仏と敬仰せられ乍らも奸淫を為し放蕩を極め其事実を暴露して輿論の攻撃を受くるも尚ほ恬、法主と称する大谷光栄（大谷光栄）氏に非ずや。社会の風紀を紊乱するものは此徒ならざる可らず。開国進取の国是を阻害するもの亦此徒ならざる可らず。而して近頃仏教各派は東本願寺の奇怪なる軍配の下に在て妄動するものなり。愚も亦甚しと謂つ靴し。苟も我が国家の改善を図るものは東本願寺の如き先づ第一に大打撃を加へざる可らざる也。

註

- (1) 三業とは、料理屋、芸者置屋、待合の三業種をさす。
 (2) 南条文雄（一八四九〜一九二七）は、仏教学者、真宗大谷派に属した。
 (3) 藤島了穩（一八五二〜一九一三）は、仏教学者、真宗本願寺派に属した。

(4) 仏教清徒同志会は、井上円了が創立した哲学館（現、東洋大学）から発展した新仏教運動団体。

(5) 大谷光演（一八七五〜一九四三）は、第三代東本願寺法主。法名は彰如。

(6) 原文は「釈迦土産」。正しく表記した。

(7) いわゆる堂班をさすか。

(8) 光演の誤りか。あるいは、光演の父光瑩のことを言ったか。光瑩については、柏木は本紙上で再三再四、手厳しい批判を加えている。

解

この論説は①「北清事件と開国進取」②、「廃娼問題の進行」、③「鉞毒問題」および④「仏骨奉迎と腐敗仏教」の四つの問題について淡々と論じたものである。

①は実は柏木の戦争観に関してきわめて重要な史料である。即ち、柏木は一八九四（明治二七）年の日清戦争時（この時はまだ彼は安中にはいなかった）には日清戦争義戦論者であった。がその後戦争というものの本質を知り、自己批判ののち非戦論に転じてゆくが、その途次の段階の論説がこれである。たしかに柏木自身の言うように、東洋の一国として西欧文明諸国に対して「開国進取」か「保守退嬰」かは「我国存亡に関する問題」ではあった。東洋人種と西洋人種とは本来的に相いれないものだが、といって戦争という選択肢ではなく「開国進取」を取るべきである。しかしその意味は「西洋皮相物質的文明」ではなく「基督教的文明」の西洋に対して国を開いてゆくべき、というものである。まだ明確に「非戦」を打ち出してはおらず、主張としてはやや曖昧である。

②周知のように、群馬県は全国ではじめに公娼廃止を打ち出したのだが、この論はその後の廃娼の全国的展開についての概略である。

③足尾銅山の鉍毒事件のその後について、群馬県民や「宗教家」はこの問題に敏感たるべし、と述べるものである。

④「仏骨奉迎」についての詳細な記録と称する『仏骨奉迎始末』（岩本千綱、大三輪延弥、一九〇〇）によると、事情はつぎのようなものであった。一八九八（明治三一）年にインド北部の「バスタイ州」「カピラバスタ」というところで釈迦の遺骨と称するものがイギリスの駐在官であったペツペにより発掘されたという。これが「仏教の継統者」である「暹羅王国」（現在のタイ）の国王にその遺骨が贈与された。そのうちの一片が大乗、小乗ともに揃った日本の仏教信者全員に与えられ、一八九九年二月一日に日本に到着したという。駐タイ大使稲垣満次郎の斡旋により、国内で「率先して奮発」したのが「真宗大谷派の参務石川舜台」であった。以後、石川の先導で日本仏教界を代表するかたちで大谷派により奉迎運動が開始された。その際の諸費用もまず東本願寺が立て替えるという入れ込みようであったという。奉迎正使を東本願寺「御門跡」大谷光演、奉迎使を西本願寺の藤島了穩、臨濟宗の前田誠節、曹洞宗の日置黙仙とするなど全宗派から代表者が名を連ねた。最終的には一九〇四（明治三七）年に名古屋に日暹寺（のちの覚王山日泰寺）を建立して仏骨を安置したという。仏骨奉迎など「迷信蒙昧」（柏木）の信者をたぶらかして莫大な資金を用いて、莫大な興行利益を貪ろうとした仏教各宗派の不純な思惑を徹底的に批判する。その動きの中心にいたのが真宗大谷派であったから柏木の怒りはさらに沸騰したと思われる。

この時期の東本願寺が、堂宇の再建などをめぐって、石川舜台、渥美契縁ら宗門官僚の強引な宗政運営による宗門、門末の経済的な状況が悪化して、その多額の負債を全国の門末に負担させようとしていたこと、さらにそれをなんとかして恢復させようとする人々（白河覚）もいたことは、あるいは柏木は知らなかったかもしれない。この東本願寺の実情とその改革運動については、森岡清美『真宗大谷派の革新

運動―白川党・井上豊忠のライフヒストリー―』（吉川弘文館、二〇一六）参照のこと。

なお、『仏骨奉迎始末』の筆者のひとり、岩本千綱ちづななる人物は、土佐の出身で陸軍にいたが、免官された後、タイと日本との経済的な関係を構築した。かくして、そもそもこの「仏骨奉迎」運動自体、濃厚な経済的背景をもっていたことが想像され、柏木の辛評が的を得ていたことが了解される。

雑録

教宗対話（其一）

○上戸は酒を嗜み下戸は餅を好く、人の嗜好はいろくである。宗教の如きものも好き好きではないが、人は何で宗教を信ぜねばならぬか。僕などは先づ宗教などは要らぬ方だ。

▲成程ソーかも知れん。併し何うですか。犬や猫が旨ひ物を喰って喜んで、打たれて悲鳴したり長閑かに余念なくころく寝て居ったり、小供に追ふ廻されたりして一生を終って仕舞ふがあゝ云ふ生涯はツマランと思いませんか。何う思ひます。

○其れはツマラン様である。

▲ソんなら人でも宗教のない生涯は丁度あんなものではありませんか。金が儲うかつたとて雀躍し、損をしたとて落胆し、酒を飲では狂喜し、病苦に逢ては失望し、空しく喜び空しく憂へ空しく笑ひ空しく悲しむ。此の如くして土中に埋めらるれば犬猫の死骸と違いはない。宗教もなく、理想もなく生活以上に更に高貴なる志望を有つて居らぬものは所謂世醉生夢死で犬猫とは余り違いはありません。学問と云へば貴く聞こえますが、併し学問を以て善き生活を買ふの方便と為し居るものは学者でも生活以下の人であります。教育家と聞けば高尚の様に思われます。併し教育の職が単に生活を得る為の一種の職業に過ぎないならば是れ亦生活以下の人であります。生活以下の人には勿論宗教の必要はない。今時行はれて居る仏教や天理教やなんかは勿論生活以

下の人、特に劣等なる人の為に行はれて居るけれども真誠の宗教は動物には必要はない。否な生活以下の人には必要はない。政治家でも学者でも教育家でも金持でも其志、生活以下に在らば犬猫の生活と余り相違はない。ナアニ生活ばかりではない名誉心があると名誉心でも道義に基づかない名誉心ならば犬や猫が主人に褒めらるゝを喜ぶと別に違ひはない。ツマリ生活や閑の山名誉心位で動て居る人間には宗教の必要が分らぬは決して無理ではない。併し宗教の要らぬ程趣味なき浅き生活は犬や猫の生活の如く誠にツマラン生活である。斯る生活を送つて一生を終るは誠に惜しいものである。だが人には明徳がある。孟子の所謂人々既に貴きものがある。聖書に所謂神の肖像がある。如何に生活以上に志なき人でも真誠なる宗教に触るゝの機会があれば宗教は勢力である。人心を醒覚して高貴なる志望を起さしむる所の勢力である。

○ソナナラ生活以上の人とはドンナものでありますか。

△人は生活の方便として存するものではなく人は其れ自身に目的である。生活以下の人とは生の方便たる人を云ふのである。生活するの外、人生に理想も目的もないものを云ふのである。生活以上の人とは永遠不朽の人格其れ自身を目的となし、此世の生活を以て唯此人格を修養するの方便として居るのである。喜んだり悲しんだりして其日々々々を無意味に過すのではなく生涯を一貫せる大目的を立て有らゆる生涯の出来事をして皆此目的を達するの資料たらしむるのである。喜びも憂ひも得も失も生も死も皆此大目的の為に働かしむると云ふのである。是が真誠なる人間の生活である。人の生活と犬や猫の生活と違ふ所は全く此に存するのである。而して又此人間生活の大目的には個人的と社会的の二方面があつて、個人的としては我品性を修養して完全なる理想に向て永遠に発達せしめ、社会的としては此世界を完全なる文明社会に漸次進歩せしむるのである。(未完)

解

人間にとつての「宗教」の必要性を「生活以上の人」(ただ動物として生きているだけの人、の意)と「生活以下の人」(生涯の大目的をもって「宗教」とともに生きる人、の意)に分けて、キリスト教という語を用いずに簡明に論じた文章である。